



秋津東小だより

令和3年度6月号
令和3年6月1日
東村山市立秋津東小学校
〒189-0001 東村山市秋津町4-35-11
TEL.042-391-8191 FAX.042-397-5411
URL <http://higashimurayama.ed.jp/e12-akitsu/higashi/>

「みんなちがって、みんないい」は難しい

校長 織茂 直樹

「連休明けまで」「5月いっぱい」と、徐々に延長されてきた3度目の緊急事態宣言。新規感染者数に限れば、第4波も下り坂になってきたようにも見えますが、手強い変異株も拡がってきており、6月20日の解除は難しいかもしれない、というのが市井の私たちの実感ではないでしょうか。今後のワクチン接種の加速に期待したいところですが、ご家庭でも引き続き、感染症対策にご配慮ご協力いただけますよう、よろしくお願いします。

さて、コロナ禍も含めた最近の社会情勢や諸問題が話題になる際に、よく登場するようになったのが、「多様性」という言葉だと思います。「多様性」の意味は「いろいろな種類や傾向のものがあること、変化に富むこと」ですが、単純に「いろいろあること」ではありません。「幅広く性質の違う群（集団）が存在すること」で、英語の類義語「ダイバーシティ diversity」と「バラエティ variety」で比べると、ニュアンスの違いが分かりやすいかもしれません。ダイバーシティは「そもそも種類が違うこと」で、バラエティは「同じ種類の中で違うこと」だそうです。最近よく使われる「多様性」は、人間で言えば「年齢・性別・人種・国籍・言語・価値観・宗教・身体的特徴などの違い」のこと、また「生物多様性」と言えば「生物の種や遺伝子や生態系などの変異性」のことで、日本でいう「多様性」は「ダイバーシティ」の方になります。

私が「多様性」の大切さを自分なりに実感できたきっかけは、2編の詩との出会いです。1つは金子みすゞの『私と小鳥と鈴と』。「鈴と、小鳥と、それから私、みんなちがって、みんないい」は、今や誰もが知っている一文ではないでしょうか。今から約100年も前の社会と暮らしの中で、みすゞがこの詩を生み出したのは、すごい感性だと思います。もう1つは吉野弘の『生命は』。「生命はすべてそ

の中に欠如を抱き それを他者から満たしてもらおうのだ」「世界は多分他者の総和」「互いに欠如を満たすなどとは 知りもせず知らされもせず ばらまかれている者同志」「そのように 世界がゆるやかに構成されているのはなぜ?」「私もあるとき誰かのための虻だったのだろう」「あなたもあるとき私のための風だったかもしれない」。この詩には、大きな生命観・世界観から「多様性」について考えさせられました。この他にも、進化生物学者の長谷川英祐氏の『働かないアリに意義がある』（メディアファクトリー新書）にも刺激を受けました。「働きアリの7割はボーッとしており、1割は一生働かない」「しかし、働かないアリがいるからこそ組織が存続できる」という説に「多様性」の考え方が広がりました。

これからの予測困難な時代に、正解のない問いに対する答えを、他者と協働しながら見つけ出し、創り出していかなければならない子供たちにとって、「多様性」の理解と尊重は必要不可欠です。しかし「みんなちがって、みんないい」の本意が子供たちにどれだけ浸透してきているのかといえば、まだまだこれからのような気がします。心配なのは「みんな違ってみんないいのだから、自分が嫌なら協調しなくてもいい」というような方向で認識されてしまうことです。新しい学習指導要領では、集団の合意形成や意思決定は「同調圧力に流されることなく…他者の意見も受け入れつつ…折り合いを付ける」とあるのですが、この「折り合い」は難問です。まずは学校でよくある多数決の場面などから、丁寧に学ばせていく必要があるかもしれません。

「多様性の尊重」とは、単に混ざっていればいいのではなく、善悪や優劣、好き嫌い等の価値付けなしに、自他の存在を否定せずに認めることだと思います。その姿勢をまずは大人と社会がしっかりと示したいものです。